

# 意志の内容

西田幾多郎

我々は知識に於ても、意志に於ても、主客合一の境に達しようとするのであるが、知識に於ては、主観が客観に従ひ、意志に於ては主観が客観に従へると考へて居る。併し我々の主観を以て客観を動かさし様はない。客観的對象界は我々によつて意識せられると否とに關せず、それ自身にて全き世界である。我々は數理を變ずることもできない、又自然界を動かすこともできない、我々の動かさし得るものは、唯我等が意識の事實あるのみである。否、我々の意識現象といへども、我々の自由に動かさし得るものではない。斯く考へれば、意志の立場は全く失はれてしまはなければならぬ、即ち自由意志は幻覺に過ぎないと考へられるのである。併し翻つて考へて見れば、知識對象の世界は意識界に依存し、意志は意識現象の根本的形式と考へることができ、我々は認識對象の世界と對立して意志對象の世界を有つ、前者は却つて後者の上に

立つと考へることが出来る。此の如き意志對象の世界とは如何なる内容を有するものであらうか。

純論理的對象として或物を他物より區別する場合、即ち單に論理的に或意味を固定する場合此の如き區別の成立するには、その根抵に兩者の統一者がなければならぬ。白を黒から區別する心其物は白でもなければ、黒でもない。或物を他の物から區別する *heterogenes Medium* は或物でもなく、他の物でもなく、此二者を超越して、而も之を成立せしむるのでなければならぬ。兩者に對して超越的なると共に内在的である。兩者と同一の意味にて之を限定しようとすれば、矛盾に陥るのである。統一者其物の立場から考へて見れば、或物を或物として他から區別するといふとは、論理的に一般者が己自身を限定することと考へることもできる。此場合、論理的一般者といふのは純なる思惟作用其物である、物の内面的構成力の謂である。一般と特殊との關係は作用と結果との關係である、即ち有機的でなければならぬ。斯く我々が純なる思惟作用として或物を限定する時、即ち純なる思惟對象を定める時、若し此思惟對象が何等かの所謂經驗内容を有するならば、例へば、我々が赤を赤として思惟するならば、限定するものと限定せられたるものとは分れて二とならねばならぬ、作用と結

果形式と内容とは分れて二とならねばならぬ。併し純なる思惟對象に於ては、限定作用其物が限定の内容である。而して或物を或物として他の物から區別するといふ限定作用は、その裏面に於て他の物を他の物として、或物から區別する限定作用を含んで居なければならぬ。即ち定立の裏面には反定立を含んで居る、肯定の裏面に否定を含んで居る。限定作用の内容が單に限定其物に過ぎない時、定立と反定立、肯定と否定とは直に交換可能と考へられる。無論、肯定作用が直に否定作用であるといふのではない、従つて或物が直に他物と同一であるといふのではない、フイヒテも云ふ如く  $A \text{ nicht} = A$  は  $A = A$  より導き來ることはできぬ、前者は後者と同じく根本的である。唯、此兩者は具體的思惟作用の兩面として不可分離的である、論理的一般者の *Momento* である。我々はこの具體的なる論理的一般者の立場に於て、肯定と否定と、定立と反定立とを交換可能と考へるのである。併し斯く肯定より否定に、否定より肯定に移るといふのは、作用其物の内面的必然であつて、他によつて然るのではない。我々は此處に於て作用と作用との直接の結合の最初の例を有つのである、所謂 *Actus naturalis* の統一、即ち意識現象の形式、意志の形式の最も單なる形を見ることができるのである。純論理的な一般者といふのは此の如き作用の統一である、意識現象として

はこれを思惟作用といふのである。此場合に於ては、考へるものと考へられるものとは未だ分れて居らぬ、作用と對象と未だ分れない、未だ主客の對立がないと云つてよい。併し一たび肯定と否定との綜合によつて具體的思惟の立場が構成せられた時、即ち *homogenes Medium* の立場が構成せられた時、我々は此の如き綜合的立場の對象として「*die Eins*」を有つ、「*一*」は位置によつて變ぜない、何處にても「*一*」である、「*一*」は完全なる具體的純粹思惟の對象である。是に於て、我々は既に主客對立の端緒を見ることのできる。「*一*」は具體的思惟の對象として、之を或物として見ようが、之を他の物として見ようが、此等の見方の變更に關係はない。此の如き「*一*」に對して、之を或物として見るとか、他の物として見るとか云ふ如き純論理的立場は主觀的作用となる。此處に考へるものと考へられるものとの對立が成立し、はじめて客觀的存在の範疇が生ずるのである。我々ははじめて非合理的要素に撞着するのである。併し或物より他物を反省し、他物より或物を反省し、具體的思惟對象「*一*」を構成する創造的立場は「*Ein Handling*」として、其中に無限の發展の意味を藏して居る。肯定と否定との合一即ち反省する立場と反省される立場との合一は、我々の自覺の根本義であつて、此の如き綜合的立場の成立は自己自身を對象とする、否自己自身によつて對象を創造する無

限の活動に於てのみ可能なるのである。「一」は他より與へられたる思惟の對象ではない思惟自身の創造である。思惟が思惟を反省することによつて、即ち自己が自己を反省することによつて、「一」が創造せられるのである。而して一度の可能は無限の可能を含んで居なければならぬ、然らざれば、「一」は死物である、定立と互定立との交換合一も不可能である。「一」は作用を離れた對象ではない、此處に數學的知識の先驗性の根據があるのである。此等の論理的一般者の發展の過程を論ずるのは、今余の目的ではないが、具體的思惟對象「一」を創造する綜合的立場が *Verhandlung* として無限に創造的であるから、論理の基たると同時に數理の基たる *class-concept* が成立すると思ふ。「一」の無限なる繰返しから、所謂外延の考ができ、翻つて此等の對象を反省し統一することから所謂内包の考ができ、反省的方向の無限に可能なることから *class of classes* の考ができる。*class* と *class* との外延の一一的對應の比較から *Kardinalzahl* ができ、種々なる統一の方向即ち内包の意義から *Ordnungstypen* の考ができる、即ち *Ordinalzahl* が成立するのである。而して斯く一方に於て、無限の分割たると共に、一方に於て無限の統一たる論理的一般者の自覺的顯現は遂に連續數の考に到達するのである。我々は此の如き論理的一般者の自覺的顯現に於て、即ち純粹思惟の體驗に於て、早く既

に一般と特殊、形式と材料との深き内面的對立及び關係を見るのみならず、精神界と自然界との對立及びその關係を見ることができると思ふ。class-concept に於て、その内包的方面が心的となり、その外延的方面が物的となる。前者は作用の性質となり、後者はその對象となると考へることができるのである。

併し我々の全人格の體驗は思惟の體驗に於て盡くされない、すべてその具體的狀態に於ては、純なる作用である。我々の人格的統一といふのは此等の作用の直接なる統一である。こゝに直接の統一といふのは思惟によらざる統一、思惟以前の統一といふことである、我々に此統一の證明を與へるものは情意の意識である、情意の意識が人格的統一の意識内容を與へるものである。思惟の立場に立つて全人格の體驗内容を統一した時、即ち思惟によつて體驗内容を統一した時、所謂經驗的事實の世界ができる。我々の經驗界とは思惟の立場から全經驗の内容を見たものである、思惟中心の人格的立場、即ち思惟と直覺との結合の立場の上に現れる對象界である。かゝる立場に於て經驗内容を統一する形式、即ち思惟と直覺との結合作用の内容は、もはや純なる數の如きものではなくして、時間、空間、因果の形式でなければならぬ。力學の對象界は此の如き作用の純なる内容を現はすものと考へることができぬ。

物力とは純なる意志が思惟によつて對象化せられたものである。思惟中心の綜合的立場に立つて全人格的經驗を統一する時、思惟に對立する他の作用の内容は非合理的なる物力として思惟我、即ち反省我に對立するのである、即ち我々の自我に對立する自然界なるものが成立するのである。嚴密に考へれば、論理數理の如き純理の世界に於て、既に含まれた主客の分立、作用と對象との對立は、是に至つて明に之を見ることが出来るのである。思惟中心の綜合的立場の對象界として現れ來る所謂經驗界に於て我々は明に *Substantialität* によつて成る自然界と *Aktualität* によつて成る精神界との對立を見ることが出来る抽象的一面と具體的根本との對立を見ることが出来る。我々は思惟の立場から赤の體驗を對象化して、「赤きもの」*das Rote*を考へる、「赤きもの」といへば、思惟に對しては非合理的となる。赤の體驗が青の體驗に變じた時、思惟の立場から赤いものが青い物に變じたと考へる、如何にして斯く變じたかは思惟に於て理解することはできぬ、思惟作用の内容中に見出すことはできぬ、非合理的である。是る於て、思惟の立場からは、此變化の統一者として、此等の變化の背後に物體を考へざるを得ない。併し直接には赤の體驗は思惟の體驗と同じく純なる作用である。赤の體驗が青の體驗に變じたといふのは、純なる作用と作用との直接結合

である。作用から作用への内面的推移である、其間一毫の疑議を容るべき餘地もない。意識現象に於ては一つの意識は決して孤立的のものではない、意識はいつでも對立の状態に於て現れる、*Einleit des Mannigfaltigen* である。赤から青への推移を意識するものは此兩者の根柢に横はる統一の意識である。具體的意識は個々の感覺の結合ではなくして、連續的である。此の如き連續的統一が即ち視覺作用である。此點よりして我々の意識は一般的なるもの内面的分化發展といつてよい。色の意識は色の概念の分化發展である。此處では意味即實在である。我々が認識對象界の上に即ち自然界の上に赤より青への推移を投射して、その背後に一つの統一者即ち物を考へるには、先づ體驗に於て思惟作用と視覺作用との直接の内面的結合がなければならぬ。赤と青との經驗は性質的に異なるにも拘らず我々は之を一つのもの變化として考へるのは、何によるか。色に於て變ずるにも拘らず、之を一物と見るのは、他の感官の證明によるとも云ひ得るであらう。例へば一枚の紙が色に於て變じたとしても、觸覺に於て不變と考へることもできる。更に又質に於て異なる感覺の統一は空間的關係によると考へることもできるであらう。空間的關係とは質に於て異なる種々の體驗を思惟によつて統一する形式である。併し斯く空間によつて



種々の經驗を統一して一つの物を考へるには、先づ體驗に於て此等の綜合的統一がなければならぬ、即ち先づ作用と作用との直接の内面的結合がなければならぬ。此の如き思惟中心の内面的統一の世界が *Aktualitätsbegriff* の上に立つ我々の意識界である。異質的なる種々の經驗の統一の基は我々の意識の直接の證明にあるのである。我々の意識界とは自己の對象たる自然界に對する思惟中心の人格的作用の反省である。思惟に對立する非合理的體驗が獨立の作用として己自身を維持しようとするから、或程度まで此等の作用の獨立を許す統一ができなければならぬ、即ち所謂意識現象界なるものが現れなければならぬのである。

物の客觀的性質は我々の欲求の對象となると否とによつて變ずることはない、水は渴者に欲求されると否とによつてその性質に増減はないと考へられるが、水が渴者の欲求の對象となるのは、その色や音によるのではない、水が味を有するに由るのである、而して味は渴によつてのみ與へられるのである。之と同じく色は眼の欲求によつて、音は耳の欲求によつて、與へられると考へることが出来る。コーエンの所謂與へられたものは求められたものである。斯く云へば、單に主觀によつて客觀が與へられる様に考へられるかも知らぬが、我々の要求といふのは、言ふまでもなく、實

現さるべきものである、即ち客觀化さるべきものである。渴者の欲求と水の味とは互に獨立して意味を成すことはできない。我々が暗室に於て不愉快を感じるのは、眼は見ることを求むるに由るのである。渴の欲求は唯、水の味によつて満たされる如く、眼の欲求は唯、色や光によつてのみ満されるのである。欲求と欲求さるる物との間、欲求と對象の客觀的性質との間には、分つべからざる内面的關係があるのである。我々の欲求は實現の對象が與へられて始めて理解することができる。我々の感覺の種々なる分化すら外界刺戟の性質の相違に従つて起つたものと考へることがができる。生物の本能といふのは此の如き内外の統一作用である。斯く考へれば、前と反對に、我々の種々の欲求は却つて客觀的性質によつて起さるると考へることもできる。要するに、フイヒテが *Ich setze im Ich dem teilbaren Ich ein teilbares Nicht-Ich entgegen* と云ふ如く、一つの作用の内面的對立に過ぎないのである。而して意志行爲とは我々が絶對我の立場に立つて此兩端の統一を圖るのである、これを一つの作用が己自身を發展完成すると云つてもよいのである。或一つの欲望が起つた時、我々は單に之を内面的と考へるのであるが、其中に己に對象への關係が含まれて居なければならぬ、客觀的對象が内在的でなければならぬ、内外統一の純粹作用の一端として成立

するのである。意志に於いて我々は自己の主観性を滅して客觀的たらんことを求めるのである。内から外に出んことを求めるのである。意志は己自身を滅することによつて、己自身を完成するのである。若しこの客觀化的傾向が十分でなかつたならば、意志は單に欲望の状態に於て止まる、即ち單に主觀的である。或は逆に純粹作用の不完全の状態が主觀的と云つてもよいのである。例へば、有理數の體系に於て一より無限に數へ行く時、一つの作用の内容が充實されて行くと考へることができらるであらう。又我々が視覺の發達によつて、これまで識別することのできなかつた色や光を見得る様になつたとすれば、視覺作用の内容が充實されて行くと考へることができらるであらう。我々は此等の作用をも自我の作用として、一種の意志行爲と考へることができらる。(有理數の體系といふ一つの *system* の性質とか、色の一般的性質とかいふ如きものが作用の性質となり、その結果として現れる内容が物となる)。併し此等の場合に於て作用の發展が一種の意志の實現と見られ得るとしても、此等の場合の如く一つのアプリオリの發展として、作用と對象とが合一する時は、之を意志の實現と見ることもできらるれば、これを知識の發展と見ることもできる。知と意と未だ分離しない、働くものと働かれるものと一である。それでは知と意との區別は何

處から起つて出来るか。有理數の無限に數へられ行くのが一種の意志の發展と見るとができるのであるが、此の如き作用はその終極に達することはできぬ、何處までも未完である。或一つの作用が完成された時、或一つの要求が満足された時、その作用が他によつて綜合された時である、渴が満された時、渴の作用は消滅するのである。或一つの問題が解決せられた時、又或欲望が満された時、我々は満足を感ずる、此の如き精神的に満足の場合、一つの作用が具體的綜合作用の中に溶かされるのである、ヘーゲルの語を以て云へば *aufheben* されるのである。物質的見方から云へば、一つの作用が消滅すると考へられるであらう。併し精神現象に於ては、超越されたる作用は、超越した作用の中に含まれるのである。(數學的思惟の中に論理的思惟が含まれるのである)。或一の欲求を満すことによつて、即ち意志實現によつて、我々の人格はそれだけ具體的となるのである、豊富となるのである。大なる人格は *シエキスピヤ* が *hybrid-minded* と云はれた如く、すべての欲求、すべての人に同情し、すべてを體驗したものでなければならぬ。それで眞に欲求の満足とか意志の實現とかいふことは作用の統一、作用の作用の上に現する事實である。此の如き作用の作用、アブリオリのアブリオリの上に於て、はじめて主客の對立が明となり、知と意との區別をも見る

ことができるのである。余は理性と意志とは本質に於て同一の作用であると思ふ、共に作用の統一作用である。ヘーゲルも「Philosophie des Rechts, Einleitung 85.」に於て意志は die schrankenlose Unendlichkeit der absoluten Abstraktion oder Allgemeinheit, das reine Denken seiner selbst を含むと云つて居る。意志するといふことと認識するといふこととの間には離すべからざる關係があると思はれる。我々は意志に於ては單に、或事を欲望するのではない、目的の實現を欲するのである。これが決意の本質である。目的が客觀的に實現せられるといふことは、目的が客觀的對象界に於て承認せられることである。此處に客觀的意志と主觀的欲求又は單なる衝動との區別がある。衝動的な生活に於ては單に主觀的感情を満足せしむる迄である。その満足が他の力によるも差支ない、要するに無意識に起る即ち自然から起る要求的壓迫を去ることができればよいのである。此の如き衝動的な生活は眞の自我から見れば、自然現象と異なることはない。我々の意志の目的といふのは、之に反し理性によつて承認されたものでなければならぬ、理性我の欲求でなければならぬ。理性によつて承認されるといふとは、作用の作用たる統一作用によつて認めらるるといふのである。自然の欲求は是に於て超自然的意義を得るのである。その満足は單なる主觀的感情の満足、

即ち自然的要求の壓迫の除去によつて得られるのではなくして、認識對象界に於ける或事實の實現によつて得らるのである。理性を有するものは自然的欲求を抑へることによつて、却つて満足を得るのである。意志に於ては、單に主觀的要求の満足を求むる如く思はれても、深く之を考へれば、客觀界に於ける自己の實現を求めるのである。此時自己が既に客觀化されて居なければならぬ。如何に自然の衝動に従ふ場合に於ても、苟も理性を有するものにあつては、満足を求むるものは自我であつて衝動ではない。自我は自己を客觀視することによつて自己の世界を構成し、自己の構成したる對象界の關係によつて自己を満足するのである。知識の對象たる自然界と意志の對象界たる自我、或は意志行爲との關係は、恰も味自體と味覺作用との關係、色自體と視覺作用との關係の如きものである。色の無限なる連續が視覺作用である、逆に云へば無限の連續たる視覺作用の或限定が色自體であり、それがデデキントの切斷の如く全作用の一點として見られる時、色の感覺となる。感覺は連續の切斷として其中に全體との關係を含んで居る、視覺の要求を含むで居る。無限なる作用の統一作用たる理性の立場に立つ時、此の如く統一作用の無限なる連續の一定として、一つの認識對象の世界ができる。此の如き無限の連續其物が意志であ

つて、その一限定が思惟である、知識は意志の一限定作用である。意志作用全體の立場から云へば、我々の認識對象界は味自體とか色自體とかいふ如きものに當り、この世界が具體的全體即ち他と無限なる關係に於て置かれた時、恰も味が渴の對象となり色が視覺の對象となる如く、行爲の對象となるのである。此時所謂客觀界は却つて主觀的となり、現實の世界は無限に可能なる世界の一として、單に欲求せられた世界、意志實現の過程となる。自我とは一つの世界と他の無限なる世界との關係、即ち具體的全體との關係を示すものである。味が全體との關係を內在的に含むことによつて渴の欲求となると一般である。我々の自我といふのは斯くの如く認識對象の世界と世界との連鎖であつて、自我の實現といふのは、此の如き對象界の推移に於て現せられるのである。意志は行爲自身に於て満足する、而して行爲とは認識對象界の純粹なる推移である。此處に自我の目的であり、自我の満足がある。若し自我が認識對象界其物を目的とし之に固定した場合には、意志は意志の本質を失ひ自然の束縛する所となるのである。

以上述べた所によつて、余は意志の哲學的本質を明にし得ると思ふ。我々の直接經驗否眞實在は作用と作用との無限なる結合である。此の如き作用と作用との直

接の結合が即ち意志である。作用と作用との自からなる結合が意志である。純粹思惟の體驗に於て、論理より數理に至る際に於ても、嚴密に云へば既に意志の面影がある。と云つてよい。唯作用と作用との統一たる人格的統一に於て、明に主客物我相對し、自然と精神、物力と意志と相對するに至るのである。此統一作用の一定が認識作用であり、その對象界が物の世界である。併し此限定作用は意志の一切斷であつて、數學者の切斷の如く全體との關係に於て立つ、即ち其中に全體との關係を內在的に含んで居る。此故に物の裏面には自我を含む、物と我とは相關である、各人の世界は各人の自我によつて異なるのである。自我とは一つの世界と無限なる他の世界との結合點である。自我はいつでも超自然的である、自然の法則によつて除り切ることのできない剩餘である。是に於て物我相對立し、物の背後に不可知的なる物力が考へられ、我の背後に主觀的欲求が考へられる。唯統一作用が自己の全體の立場に立つ時、即ち意志の立場に立つ時、内外を打して一つの行爲となる。自然界は意志實現の手段となり、自然法はカントの所謂 *Typus* となる。故に意志はいつでも超自然的である、倫理的自由である。心理學者の所謂意志は對象界に射影せられた意志である、物力の複雑なる結合に過ぎない。意志は倫理的自由の意志としてはじめ



それ自身の意味内容を有するのである。

## 二

意志の本質が以上述べた如きものとして、意志の對象界及びその内容は、如何なるものであるか。ブレンターノの云ふ如く精神現象の物體現象と異なる所は對象の内在性にあるとするならば、意志の本質を明にするは意志の内在的對象を明にせねばならぬ。實驗必理學者は精神現象に於ては要素の綜合によつて新なる意味内容を生ずると云ひながら、唯之をその要素に分ち、その結合を説明するだけにて満足して居る様に見える、單に精神現象の因果的生起を説明してその本質を説明し得たと信じて居る。自然現象に於ては、種々なる性質は實在の符號であつて、それ自身の實在性を有たぬから、此等の現象を時間空間的に分析し、その因果的關係を明にすれば足るのであるが、精神現象に於ては、その内面的統一、その内面的發展を明にせねばならぬ。即ち下から説明するのみならず、上からも説明せねばならぬ。例へば、空間的表象は光覺や眼の運動感覺等の結合したものであるか、此等の感覺其物の中に含まれて居ない空間的秩序 *räumliche Ordnung* を含んで居ると考へられる。ヴェントも *psyche*

hische Gebilde の性質はその要素の性質を以て盡すことはできぬと云つて居る。空間的表象は實に此の如き空間性の實在化によつて成立するのである。此の如き空間性とは如何なるものであるか。所謂經驗論者は事もなげに空間性などいふ如きとは非實在的であつて、單に一般概念に過ぎぬと云ふでもあらう。併し我々の精神現象に於ては、感覺的要素の外面的結合を以て説明することのできない新なる經驗が之によつて創造されると考へるならば、それは單なる一般概念ではなくして、物力が實在的と考へられる以上の意味に於て、實在的と考へられねばなるまい。精神現象に於ては、物體現象と異なり意味が直に實在的と考へられるのは之によるのである。余は此の如く、精神現象に於て即ち直接經驗に於て新なる事實、新なる實在を創造するものが、認識論者の所謂經驗のアプリオリであると思ふ。認識のアプリオリとは、我々の經驗を内から創造する内面的力である。幾何學といふ先驗的學問の基礎となる純粹空間は、心理學に於て空間的表象と名づけらるる新なる psychische Gebilde を構成する構成作用であると思ふ。無論、此の如き言には種々の反對も起るであらう。主觀的なる心理的空間や時間と客觀的なる物理的空間や時間と全く違ふといふのが、普通の考へ方ではあるが、客觀的空間といふのも、要するに所謂主觀的空間

を概念的に綜合統一した結果に過ぎない。その測定の基礎となるものは何處までも主觀的空間である、空間的表象の質的相違である。心理的個人の意識對象として主觀的空間があり、超個人的意識對象として客觀的空間があるのであるが、兩者の根柢には同一の構成作用即ち純粹空間があるのである。此の如き構成作用の純なる内容が幾何學であつて、經驗的空間はその特殊なる形の一つに過ぎない。それで我々の精神作用といふのは、カントの所謂アプリアオリを離れて理解することはできない、價値の構成を離れて精神現象は存在し得ない。意識現象は唯目的に向つて進むものとして、目的が内在的なるものとして理解し得るのである。精神現象は對象的關係によつて區別せらるると考へられるのは之によるのである。空間的表象の目的は空間の知覺である、空間の規範に従つて空間を構成するにあるのである。此點に於ては思惟が論理の規範に従ふと同一である。

ザントに従へば意志とは情緒の、その終に於て突然表象及び感情の内容を變じて終結する如きもの謂でなければならぬ。併し此の如き見方は精神現象を外から見たのであつて、之を内から見て直にその本質を明にしたものではない。ザントは之を内省的事實に本づくると考へるかも知らぬが我々の經驗はいづれも直接であり、内

省的である、否内外の區別はない、内外の區別はその見方から起るのである。右の如き見方は氏の所謂 *Substanzbegriff* による自然現象の見方と何等異なる所はない。精神現象を全體から切離して單に對象化し物體化して居るのである。若し氏自身の云ふ如く、精神現象の物體現象と異なる所以は *Aktualitätsbegriff* の統一の上に立つにありとするならば、その内面的統一の意味を明にせねばならぬ、即ち氏の所謂綜合的統一の意味内容を明にせねばならぬ。自然現象に於てはかゝる説明は附屬的であるかも知らぬが、精神現象の本質は唯之によつて明にせられるのである。今前に空間的表象の創造的綜合として、空間のアプリアオリ即ち先驗的空間といふものを考へた如く、意志現象に於て此の如き先驗的基礎を求むるならば、それは言ふまでもなく道徳的自由といふことでなければならぬ。先驗的空間によつて、一方に於て客觀的空間が成立すると共に之に對して一方に於て主觀的空間表象が成立する如く、先驗的自由によつて、一方に於て意志の對象界が成立すると共に一方に於て心理學者の所謂意志の現象が成立するのである。意志と情緒との内面的相違は此にあるのである。すべて精神現象といふのは *Aktualitätsbegriff* の上に立つ作用の結合であつて、情意とは此の如き作用統一の状態、即ちアプリアオリの内容を表すもので

はあるが、意志と感情との異なる所は、先験的自由の上に立つと否とにあるのである。先験的自由といふことは相對的主觀が相對的客觀を動かすとの意味ではなから、Ich setze im Ich dem teilbaren Ich ein teilbares Nicht-Ich entgegen. の意味に於ての自由である。嘗て論じた如く、感情をアプリオリの統一の内容とすれば、意志はかゝる結合の極限である(藝文昨年九月號)。此の如き連結の極限の立場の上に即ち意志の立場の上に所謂經驗界が現するのである。所謂客觀的實在界とは意志作用の内容に過ぎない。我々の意志の現象は普通に考へられる如く内より生起するのではない、内外の統一點より生起するのである。目的の實現可能の意識が意志の生起である、所謂認識對象界を主觀の中に含み得ることによつて生起するのである。此意味に於て意味は最初より道德的である、自我と世界との關係問題である。嚴密に云へば倫理的意識がなければ意志の意識はない、我々は自由を意識するによつて意志の意識が成立するのである。然らざれば、意志行爲は情緒の表出運動と異なる所はない。無論此の如き言を成すには、意志の自由に反對する種々の議論を顧慮せなければなるまい。余は今自由意志に關する詳論に入込む暇はないが、此等の議論の多くは意志を認識對象界に投射して自然化するより起るのである。併し認識對象界に映されたるもの

は意志の射影であつて、意志其物ではないことは言ふまでもない。

我々の意志の意識が、右に述べた如く、自由のアプリオリによつて成立するとするならば意志の意識内容とは如何なるものであるか。順序の交換可能即ち同時存在の關係を本質とする空間のアプリオリによつて、所謂物體界が成立すると考へられる如く、自由のアプリオリによつて成立する意志の對象界とは如何なるものであるか。余は意志の意識内容の根本的性質は一般と特殊との内面的統一といふことであると思ふ。而して一般と特殊とを内面的に結合するものは個性であるから、意志の意識内容は個性であると考へることが出来る。種々の經驗内容の連結に於て、一般と特殊との結合はすべて意志であると云つてよい。一般より特殊に移る即ち一般と特殊との結合といふことに就いて種々の場合を考へることが出来る。Law of assumption に基く普通の論理學に於いて考へられる如き一般と特殊との關係は、單に偶然的である。例へば書籍が先づ大きさによつて分けられ次に國語によつて分けられるれば、前者は genus となり後者は species となるのであるが、此の如き一般と特殊との關係の偶然的なるは言ふまでもない。我々は此の關係をば逆にし、却つて後者を genus とし前者を species とすることが出来るのである。此の如き場合には、一般

と特殊との結合の内容は全く零と言つてよい、無内容の意志と考へ得るのである。併し無内容といふことは結合の自由といふことであつて、單に無力といふことではない、却つてすべての經驗内容を結合する自由の意志と考へることができらる。

余は此の點に於いて數學の羣論に於ける單位 *Einheit* 卽ち *Identität* の考に多大の興味を有するのである。乘法を *Kompositionsregel* とすれば、零を除けた *System der rationalen positiven Zahlen* が一つの羣 *Gruppe* を作るが、加減法を連結の法則として取れば、零と負數とを入れた有理數の體系が一つの羣を作り、零がその單位となる。此場合、零は單なる無ではなくして、此體系に缺くべからざる要素である、體系轉換の中心である。單位はいつでも羣の *Normalteiler* となるのである。次に意識内容間に内面的關係あるものに就いて考へて見よう例へば、三角形が正三角形、二等邊三角形、不等邊三角形とに分たるといふのは、三角形の概念から見て内面的に必然と考へられる、又ユークリッドの平行線の *Postulat* を取るならば、三角形のすべての角の和は二直角に等しいと云ふ如きことも内面的必然を以て證明なし得ると考へられねばならぬ。三角形が各邊の等否の關係によつて三種の特殊なる三角形に分たれるといふことは、見方によつては偶然的とも考へ得るにも拘らず、一種の内面的必然を感ずるのは何に由る

のであるか。此の如き場合に於ては、一般なるものが、特殊的なるものに對して、偶然的、外面的ではなくして、その内面的構成力なるが故である、ヘーゲルの云ふ如く *Das un-cum-suiens aller Lebendigkeit* なるが故である。此の如き具體的一般者の立場から見れば、向に一般的と考へられたものも却つて特殊的となる、即ち相關的關係の一端に過ぎないと考へることが出来る。平行線の原理によつて三角形の角の和が二直角に等しいと云ふ如きことを證明する場合には、更に此具體的統一、即ち一般者が擴張せられねばならぬ。余は數學者が方程式を解くため *Adjunktion* によつて數の *Körper* を擴張し行くといふのも、此の如き意味に於ける具體的統一の擴張でなければならぬと思ふ。例へば有理數の *Körper* に無理數を附加した *Körper* が要せられる時、方程式によつて表された或關係が、もはや有理數の對象界に於て求めることができなむといふことを意味して居る、即ち更に具體的なる連續數の對象界に於て之を求めねばならぬと云ふことを意味して居る。前に一般と特殊との結合が偶然的と考へられた時、かゝがる統一の内容即ち意志内容が零と考へられたが、次の場合に於ては、統一は明に何等かの特殊的内容を有つて居なければならぬ。我々が一種の内面的必然を感ずるのは之によるのである。斯く統一が定つた内容を有つ時、一般なるもの




と特殊なるものとは動かすべからざる對立を成し、特殊なるものは一般なるものによつて各唯一の地位を得るのである。無論かゝる一般的内容も單に意識されたものとしては、バークレー等名目論者の云ふ如く、單に名目にすぎぬと考へ得るでもあらう。然し右の如き内面的統一の内容は單に抽象的一般ではなくして、一般と特殊との結合の内容である、個性 Individualität の内容である。認識のアプリアオリの如きものも、普通に考へられる如く、單に抽象的一般ではなくして、一般と特殊との結合の内容である、即ち個性的内容である。具體的一般者としての三角形の内容、即ち三角形の個性的内容は、單に三個の線分にて成れる平面形といふことまではなくして、三角形の種々の幾何學的性質を含んだものでなければならぬ、云はば無限進行の内容でなければならぬ。幾何學者が三角形の定義を右と異なつた定義に言表した時、抽象的一般概念としては異なるものとなるも、具體的一般概念としては同一でなければならぬ。此の如き場合に、我々は明に抽象的一般概念と具體的一般概念との區別を見ることができる。Twardowski の如く内容と對象とを區別して見れば前者は抽象的であつて、後者は具體的と考へることができらるであらう、此故に客觀的と考へられるのである。

右に述べた如く、認識對象界に於ても、所謂客觀的眞理とは一般と特殊との結合であり、眞理が客觀的となればなる程、此方向に進むと考へ得る、即ち知識の根柢に意志的結合があると考へ得るのであるが、所謂認識對象なるものは、如何に特殊的であっても、認識對象となるといふことが既に一般的なることを意味して居る。經驗的事實の世界といへども、それだけでは單に可能的世界の一として、嚴密に限定的ではない、我々は他の結合を考へ得るのである。最一般的なるものと最特殊なるものとの結合、即ち眞に個性的なるものの統一内容は、之を意志の内容に求めねばならぬ。我々の意志の内容は全經驗の具體的統一の意味内容である。「私が今茶を飲む」といふ意識内容は單に茶を飲むといふだけの意識内容ではない、非人格的渴といふ本能が働くのみではない、渴して茶を飲む一例ではない。私といふ個人が即ち一人格が茶を飲むのである。此故に此事實が既に倫理的判斷の對象となることもできれば、藝術的對象となることもできるのである。自然が藝術的對象となるのは皆此意味を寓するにるのである。此個性的内容は知識の立場に於ては *incommensurable* である。我々の意志現象は時間、空間、因果の範疇によつて構成せられた自然科學的對象界に屬する事實ではない。我々の意志は此の如き可能的世界の無限なる統一の

上に現はれるのである。個性とは此の如き統一の内容である。我々が或物を意識する時、それは如何に單一なる意識であつても、超自然的意義を寓して居る、單なる可能的世界の事實ではなくして、無限なる可能的世界との關係を含む現實の世界の事實である。我々が感覺を單一なる意識内容と考へたり、又意識さるといふことは意識内容に何物を附加せないと考へるのは、此區別を明にせない故である。意識さるといふことは、意識内容が特殊化されることである、即ち現實となることである、換言すれば現在の意識が他と無限なる關係に於て立つことである、所謂經驗的事實の世界に於てのみでなく、超經驗の世界と無限の關係に於て立つことである。此處に具體的經驗の絶對性がある。經驗學派が思惟を棄てて經驗的事實に依らうとするのも理由がないではない。説明は種々にできるであらうが、事實は唯一である。我々は是に於て全く異なつた立場の上に立つのである、即ち全體の立場の上に立つのである。唯從來の經驗學派なるものは、此の如き具體的經驗の代りに、却つて思惟の範疇の上に立つ抽象的事實を考へて居る。かのプラグマチストの如きも知識の根柢に生命を考へるが、生命の内容と考へるものは抽象的なる生物的生命の意義に過ぎない。斯くてはその目的とする特殊性は、何處にも求め様はないのである。眞

に特殊なるものは個性的でなければならぬ、全體を部分の中に含んだものでなければならぬ。ライブニッツの考の如く、部分の中に全體を含むことによつて、部分は特殊となるのである。然らざれば特殊は抽象的一般と擇ぶ所ない。是故に意識の根本的形式たる意志内容のみ、眞に特殊なることができるのである。意志は單なる *principium individuationis* ではなくして、ヘーゲルの云ふ如く *die in sich reflektirte und dadurch zur Allgemeinheit zurückgeführte Besonderheit* である、即ち *Einzelheit* でなければならぬ。  
(*Philosophie des Rechts, Einleitung. §7.*)

意志内容即ち自由のアブリオリの上に立つ倫理的内容は一般と特殊との最終の結合である、即ち個性的であると云ふことは、普通に考へらるる如き意志は内外の一致であるとか精神と肉體との結合であるとかいふことの最も根本的なる意義であると思ふ。意志行爲とは一般と特殊との結合の極致である。我々の手を動かすといふ表象に對して手が動くといふことは、手の運動が外から偶然的に附加されるのではない。運動の表象は運動の精神である、表象と運動とは一つの作用の兩端である。運動が實現されるといふことは、作用の作用  アブリオリのアブリオリの上に立つ對象界に於て、認められることである。此立場に於て統一さるる時、我々の意識

内容が絶對的に特殊化さるのである。超認識的なる具體的統一の立場に於ては、運動の表象と運動とは未分以前の統一の状態に於て含まれて居るのである。運動の動機といふのは此の如き統一の端緒である。此要求が全人格的統一の立場に於て内面的に統一せられた時、此要求が特殊化せられ、實現されたと考へられるのである。我々が意志する、働くといふことは、自己の人格的體驗の全體を統一することである、即ち經驗内容を何處までも特殊化することである。情緒の状態は言ふまでもなく、動機の状態にあつても、我々の意識内容は未だ抽象的一般たるを免れない、尙單に可能性を有するに過ぎない。唯、行爲に於てのみ、我々の意識内容は客觀的歴史の中に織込まれて、動かすべからざる事實となり、唯一の特殊性を得來るのである、即ち眞の特殊性は内外の統一、全人格的體驗の統一の上に於てのみ得らるのである。所謂物質界とは人格的體驗の否定的統一の對象界に過ぎない。我々が自己の意志を物體界に實現するといふことは、全體験の中心的統一作用即ち思惟作用と結合することである、即ち一たび一般化することである。眞に特殊なる内容は一たび一般化することによつて、即ち物體化することによつてのみ得らるのである。我々の身體は此の如き特殊化の機關である。精神を離れた單なる物體界は抽象的と考へ

られるが、身體を離れたな單なる精神界も抽象的たるを免れない。眞に具體的なるもの、特殊なるものは兩者の結合點に存するのである。我々の經驗内容を特殊化する「時」の範疇は意志の形式である。カントが“Die Zeit bleibt”といふ如く、よつて以てすべての變化を考へ得る「時」は一面に於て不變である、即ち空間である。此不變の一面によつて時は流れ得るのである(未完)